

戦後のハイデガーの最初の出版物となった、いわゆる「ヒューマニズム書簡」は、1940年の論文「プラトンの真理論」の末尾に述べられていた「ヒューマニズム」に関連してジャン・ボフレが示したいくつかの問いに答えるかたちで書かれている。しかし、「ヒューマニズム（人間主義あるいは人道主義）」についての手紙」と題されてはいるものの、ハイデガーの論述は、存在論を補完する人道主義的な倫理学の執筆を望む世間の期待に反して、「ヒューマニズム」を根底から批判し、その克服を図るものであった。「ヒューマニズムについて」という表現は、「ヒューマニズムを超えて」とも読まれるべき内容だったのである。ハイデガーによれば、「人間らしい人間(homo humanus)」の「人間性(humanitas)」を目指す西洋の「ヒューマニズム」の根底には、「理性的な動物」という人間理解が存しており、この人間理解はそれ自身、西洋の「形而上学」に根差している。「ヒューマニズム書簡」におけるハイデガーの批判は、人間主義としてのヒューマニズムに対してだけでなく、西洋の「形而上学=哲学」の全体にまで及んでいるのである。

「ヒューマニズム書簡」におけるこのような「形而上学=哲学」批判の端々には、また、ハイデガー自身の思索の根本問題が示されている。それは「言葉」をめぐる問題である。だが、そこで言われる「言葉」とは、通常の言語論や言語哲学で主題とされるような、「記号」としての言葉ではない。また、『存在と時間』での「語り(Rede)」のように、人間存在の存在論的な基盤として考えられるような「言葉」でもない。そうではなくて、後の『言葉への途上』において、「言葉が語る（言葉が言葉する）(Die Sprache spricht)」と表されるような「言葉」である。それは、言葉を言葉以外の何ものかによって基礎づけたり説明したりすることになる「人間が語る言葉」ではなく、どこまでも「言葉を言葉として言葉へもたらしこと」からとらえられた根源的な「言葉」である。そしてこの根源的な「言葉」の具体的な姿を、1930年代半ば以降のハイデガーは、「詩作」あるいは「詩作的思索」のうちに求めていったと考えられる。すなわち、「ヒューマニズム書簡」における「形而上学=哲学」批判の背後には、「形而上学=哲学」とは異なる「将来の思索」の可能性を「詩作」に求めるハイデガーの根本的な態度が存しているのである。

そしてそのように「詩作」に接近するハイデガーの思索は、現代の思想に広範な影響を与えることになった。ローティによる哲学と文学をめぐる議論も、そのような反響の一つとして考えられるだろう。ローティは、哲学を、恒久的な真理を探究する学としてではなく、他の文芸と同じような「エクリテュールの一種」として考えることを提唱し、さらに、哲学を文学へ至る「過渡的なジャンル」とみなしている。ローティによれば、西洋の知識人たちが救いを求めてきた対象は、ルネサンス以降、「神」、「哲学」、「文学」という三つの段階を経て変わってきた。現代の知識人たちは、真実が確実にとらえられるということをもはや信じなくなったがゆえに、あるいは、「無限なるもの」が魅力を失い、有限主義が常識となったがゆえに、哲学に救いを求めようとはせず、それに代わって、多様な人間のあり方をわれわれに教えてくれる文学に救いを求めるようになる。ローティによれば、この移行は「前進」

であり、望ましいものである。〈哲学は文学に移行し、文学に解消されるべきものである〉という、このようなローティによる見通しは、「哲学の終わり」から「詩作」に接近したハイデガーの思索の歩みに共鳴したものだと言えるだろう。

「哲学は文学のようなものになるのか」——この問いをわれわれはどのように受け止めるべきだろうか。ハイデガーの「詩作的思索」が指し示す方向は、まさにこのように理解されるべきものなのだろうか。それとも、この問いは、考慮するに値しない素朴な問いなのだろうか。本発表では、この問いをめぐってどのようなことが考えられるのか、考察を進めていきたい。考察のなかでは、〈哲学のあり方自身が問いに付されるということ〉、〈ハイデガーの「詩作的思索」の根本的な特徴〉、〈「人文主義（フマニスムス）」との関わり〉などが問題となっていく。